



|              |                                                                             |
|--------------|-----------------------------------------------------------------------------|
| Title        | 哲学にとって臨床とは？：倫理的考察                                                           |
| Author(s)    | 鷺田，清一                                                                       |
| Citation     | 臨床哲学ニューズレター．1997，1，p. 60-71                                                 |
| Version Type | VoR                                                                         |
| URL          | <a href="https://doi.org/10.18910/81712">https://doi.org/10.18910/81712</a> |
| rights       |                                                                             |
| Note         |                                                                             |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 哲学にとって臨床とは？ ————— 倫理学的考察

鷲田清一

## I 哲学にとって臨床とはなにか？

### 1 〈臨床〉と〈応用〉

哲学としての倫理学は近年、かつて倫理学の主流の位置をしめていたメタ倫理学に典型的にみられるような、メタレヴェルでの非規範的な議論——現実への非関与性——から、社会の実際的な場面での規範的な倫理的判断の学へと、大きく再転換しつつあるように思われる。その場合に、現実への関与性——わたしたちの言葉でいえば「臨床性」——は、倫理学の領域においてはしばしば、「応用」(application) という概念で表現されてきた。そして、生命倫理学、環境倫理学、コンピュータ倫理学、ビジネス・エシックスといった実際的な倫理学は、現在、応用倫理学 (applied ethics) として統合されつつある。

この「応用倫理学」という理念はしかし、原理と応用、理論と実践といった二分法を前提としており、それゆえに、臨床から離れた非臨床的な一般理論や基礎理論が倫理学においてあたかも可能であるかのような幻想をわたしたちに与える。というのも、applied というとき、そこには純粹理論という pure な学問に対して impure なもの、ないしは confusing なものという含意があるし、また theoretical な作業に対して practical な作業という限定が、あるいは abstract な作業に対して concrete かつ context-dependent な作業という限定が、必然的にともなってしまう。そこで、倫理学における〈臨床性〉をそれとは区別されるかたちで、いかに規定するかという問題が浮上してくるのである。

他方ではしかし、ソーシャルワーキング、ボランティア、看護、ケア、教育などの仕事にかかわっている人びとが、その現場のただなかで、最終的に「死とは何か」「他者とは何か」「生きることの意味」「道徳の根拠」「学校とい

う制度の意味」などといった問題に直面し、そういう問題を哲学・倫理学的にもっと突っ込んで考えたいという、哲学・倫理学的思考へのニーズを強く感じているにもかかわらず、従来の倫理学研究は、それにまだ十分に応えているとは言えない。

このように、倫理学はいま二重の意味で、その〈臨床性〉の意味を明確に規定する必要に迫られていると思われる。

しかしこの問題が、倫理学の「応用倫理学」的転回のなかでじゅうぶんに答えられるかについては、わたしはいま、やや否定的な見解をとっている。それはまず、「応用」という考えかたをとることによって、その応用という場面とは別に、つまり倫理学にとっての臨床的な場面とは別の場所で、倫理学の基礎理論がそれだけで可能であるかのような誤解が生じるおそれがある。倫理学にいま突きつけられている〈臨床性〉の問題は、まさにそういう、臨床的な場面から離れたところで倫理学の基礎理論が可能であるという考えかたにこそ、再考をうながしているように思われるからである。

このような問題性に含まれたことがらをいくつか指摘しておけば、まず第一に、応用倫理学の試みにおいては、歴史的・社会的な状況が応用の場面としてとらえられることによって、基礎理論そのものが組み込まれている歴史的な制度やその政治性が隠蔽されるおそれがある。

第二に、応用倫理学がそれぞれの「応用」領域に分岐してゆくことによって、倫理学は新たな専門分化に陥る可能性がある。

そして第三に、哲学としての倫理学が、解決不可能な哲学的な根本問題をエポケーしたまま手続き論に終始してしまうおそれがあるということである。これは、現存のカテゴリー分節を無批判的に前提する危険といいかえてもよい。ここではわたしたちの思考の、歴史的に規定されたパラダイムの性格そのもののメタ・クリティックを内蔵するような思考こそが要求されているといえるだろう。とはいえ、だからといって、解決が引き延ばされてよいというわけではない。これまで哲学的問いの「深さ」や「根源性」はけっして、解決にいたりえないことのアポロジーとされてはならない。

## 2 〈応用〉という概念の問題性

### ——いわゆる理論と実践の媒介をめぐる

「応用」という概念の問題性については、たとえば「純粹」な原理や理論といったものの不可能性への反省という面から論じることができようし、さらにそのためには、理論／実践（応用）という二分法の上に立ってきた近代的学問の理念を批判的に検討しておく必要がある。これはかつて、哲学批判・科学批判の作業と連携するかたちで、《実践哲学の復権》として、ドイツの哲学研究者たちを中心に組み込まれたことがある。これについては、『実践哲学の現在』（世界思想社、1991年）のなかでわたしが報告しているが、倫理学における臨床性という問題との関連で重要なことがいくつかあるので、その運動が提起していた問題のポイントをはじめに簡単にふり返っておきたい。

《実践哲学の復権》の運動は、ある共通した一つの問いから開始された。それは、「哲学はいかにして実践的でありうるか」という問いである。そしてこの問いが、同語反復ではなくて形容矛盾でしかありえなくなっているところに、〈実践〉という概念が今日置かれている問題状況がうかがわれる。この点についてリーデルは、『実践哲学の復権』の序言のなかで次のように書いている。

《実践〔的〕哲学》（praktische Philosophie）——このような概念結合は、哲学というものについての通常の教育上の理解におよそ適合しないように見える。というのも哲学は何を措いてもまずは理論（Theorie）であり、理論としてそれは、諸々の対象を諸々の実践的な指示連関ならびに目的連関から解除して、それらを実践からも価値からも自由に、そしてその〈対象性〉において概念的に捉えることができるように、かのギリシア人によって方法的に培われた態度、つまり観想する・考察する・傍観するという態度（ギリシア人はこれらを一括りにしてテオーリアと呼んでいる）でもって諸対象に関わっていくものだとされているからである。（アリストテレスにはじまりヘーゲルにいたる）《理論〔的〕》哲学の様式化の古典的範例をめぐるイデオロギー的に短絡された解釈のまさにその産物として、十九世紀に出現し、その後ただちにそれに対応するかたちで実証諸科

学によって価値自由の要請として定式化された、この理論の優位という考え方に立てば、哲学は《実践的》なものでありうるということ、あるいは哲学はいかにして《実践的》たりうるかという問いは、およそ理解しがたいものである。というも、《実践〔的〕哲学》という表現は、この場合には形容矛盾になってしまうからである。

Manfred Riedel (Hrsg.), *Rehabilitierung der praktischen Philosophie*, Bd. I, 1972, S. 9.

今日ヨーロッパでことさらに〈実践〉概念の再考が、あるいは《実践哲学》の復権が叫ばれるのは、〈実践〉が〈理論〉との概念的な対立関係に入りこむことによって〈実践〉（プラークシス）の概念が極度に切り詰められてしまったという危機意識があるからである。このことを裏がえして言えば、哲学はなぜ「社会の《実践的》審廷」（リーデル）としての機能を失って、ただの〈理論〉になり下がってしまったのだろうかという反省が生まれつつあるということでもある。〈理論〉と〈実践〉——これはたしかに現代のわれわれにとってあまりにもなじみの深い概念対ではあるが、このような対立はかならずしも古代ギリシアにおけるテオーリア／プラークシスの対立と重なるものではないということ、往々にしてこのことに《実践哲学》の復権のための手がかりが求められているように思われる。たとえばヴィーラントは、近代社会にみられる理論と実践の対立がかつてのテオーリア／プラークシスの区分からいかにずれてしまっているかについて、次のように述べている。

今日人が科学の領域において理論と実践との媒介について語る場合、応用という範疇を用いるのが普通である。応用科学という概念が基づいているのは、実践を免除された純粹理論なるものが存在しており、理論の成果は、後から人間の行為や政治的判断の領域の中で、理論の目的とは別の目的のために利用されるという考え方である。

Wolfgang Wieland, „Praktische Philosophie und Wissenschaftstheorie“, in: M. Riedel (Hrsg.), *ebd.*, Bd. I, S. 528. [村田純一訳「実践哲学と科学論」]

これらのたんなる概念史的記述ともみえる文章のなかには、近代社会における知のあり方への強烈な批判的意識がこめられている。ここでめざされているのは、「理論」と「実践」との媒介ではない。実践が理論の対項とされることによって、つまり、実践との関連（Praxisbezug）をそれ自身にとって副次的なことからとみなす〈純粹理論の理念〉の方から実践が「応用」として逆規定されることによって、《実践的なもの》がいかに矮小化されてきたかを、そして、そのように実践を理論との対立関係に置く近代の学問理念が実践のみならず〈知〉そのもののあり方をいかにいびつなものにしてきたかを、批判的に培り出すこと、そのことがここで課題として提示されているのである。その意味では、現代の〈実践〉論とは、実践に与しないことを自らの義務としてきた近代的な〈知〉一般の自己批判の一形態にほかならない、とすることができるかもしれない。

ガーダマーが指摘していたように、実践という概念は本来、理論との相互に外的な対立関係において設定されたものでも、理論の「応用」として規定されたものでもなかった。現代の「科学技術」を見るまでもなく、技術あるいは「職人たちの技」についてのフランシス・ベーコンやデカルトの発言のなかにもすでに明確にうかがえることであるが、西欧近代においては、〈テオリア〉対〈プラークシス〉・〈ポイエーシス〉というアリストテレス的な構図がすでに崩れ、観想的な知としての理論（Theory）＝科学と製作的な知としての技術とが直接的な連繋関係に入る（科学の技術化／技術の科学化）ことによって、観想的な知（scientia contemplativa）とみなされてきたものが操作的な知（scientia）へと変貌しはじめている——藤沢令夫はこのように指摘している。

製作されるものは製作することそのことが目的なのではなく、あくまで何かのために製作されるのであるが、この「何のために」、つまり何かが製作するに値するものであるかどうかへの反省を欠落させたまま、現代では価値外在的な理論＝科学と技術とが無媒介的に連結してしまっている。何にをなしうるかという問いと、何をなすべきかという問いとが、後者を封じこめるというかたちで切断されているというわけである。このことをリーデルはまた、次のような言葉で指摘している。「《実践哲学》の構想のなかで反省され、根拠づけら

れてきた理論と実践の統一はいまや、概念による正当化の手をすり抜け、——実践理性の境界のいわば外部で——テクノロジー（物質的暴力と化した自然科学）と政治的イデオロギーという自然発生的な形態をとっている」、と。

### 3 倫理学における臨床性の問題

上のような議論の脈絡を念頭に置くなれば、社会の臨床的な場面への倫理学の関与は、知一般の自己批判（科学批判）という哲学的学問論の問題と切り離しては論じえないことになる。そこでこのことを強く意識しているわが国の倫理学研究者の発言のいくつかを、次に引いておきたい。

たとえば、「環境問題というとらえ方そのものが人間中心主義の表現だ」という丸山徳次の指摘は、環境倫理学と科学批判の不可分性にわたしたちの注意を向ける。「科学批判の動機と成果を無視したところで環境倫理学が追求されると、それは専門家による専門家のためだけの机上の空論に限りなく接近する危険性をはらんでもいる」。このように述べる丸山は、自然の対象化＝知的同化をこととする近代自然科学は、物質的に同化された自然をモデルとして発展しながら、人間による自然の物質的同化そのものをテーマにはしてこなかったとして、「自然の社会科学」の必要性を説く（丸山徳次「環境倫理学と科学批判」、『環境技術』Vol. 23, No. 7）。

また川本隆史は、応用倫理学の発想の不可避性を強く主張しながらも、それが知の政治性の批判を内蔵しなければたんなる倫理工学に堕してしまうと警告している。「そもそも応用倫理学の端緒を開いたのは、徴兵に対する市民的不服従、患者の権利運動や消費者運動、環境保護運動といった一連の抵抗運動であった。それなのに、そうした実践の中で育まれた「ローカルな民衆的な知」（フーコー）を「学問の自由」を脅かすノイズと決めつけるようなシンガー流の「応用倫理学」は、モラル・エンジニアリングと何ら変わるところがあるまい。これとは逆に、科学的知の専制のもとに貶められた「民衆的な知」も「均衡」の要素に含めながら、それぞれの知がいかなる権力関係によって産出されたものかに対する注意を怠らないこと、「規格化する（ノーマライズ）権力」（「通常科学化する知」といってもいい）への抵抗を意識的に組み込むこと—

「私が現在、考えている方法は以上のようなものだ」と述べている（川本隆史「応用倫理学の挑戦——系譜、方法、現状について」、『理想』第 652号）。

さらにもう一人、水谷雅彦は（川本やわたしもともに編集に参加した）『マイクロ・エシックス』のなかで、そのような倫理学の構想にふれて次のように書いていた。「本書は、極限的な倫理的大問題ではなく、いわば身の雑事を「倫理的」に問う。それは、事大主義を避けるあまりに瑣末主義に逃げ込むとか、倫理学を現代風俗論に還元してしまおうということを意味しているのではない。たとえば「大声」を倫理的に問えない者が、一挙に「環境問題」を倫理学的問題となしうるはずがないというのが編者の本音でもある。「倫理的問題は細部に宿ったもう」……それは、「生命」や「環境」だけが倫理学に残され、割り当てられた領域であるかのようにみるマスコミに代表される世間の風潮に対する反発、そして、しばらくお座敷がかからずお茶をひいていたのが、急にお声がかかってはしゃぎながら厚化粧をはじめるといった風情の自分たちに対する自戒の表現でもある」、と（川本隆史・須藤訓任・水谷雅彦・鷲田清一編『マイクロ・エシックス』、昭和堂）。

あるいはもっと別の視点からこのような知の批判に光をあてるなら、次のようにそれを描きだすことも可能であろう。つまり、近代科学的な知は、痛みとか苦しみといった受苦の契機を、非合理的なもの、主観的なもの、特殊なものとして、われわれの認識の領域から放逐してきたが、そのかぎりにおいて、臓器移植の問題も、郊外や環境汚染や廃棄物処理の問題に直面しても、身体や生命に対して、あるいは自然環境に対して、操作的なかわりしかもてなくなっていることへの反省としてである。そうすると、そういう対象化的・操作的な知ではなく、受容的な知、ないしは（環境および他者との）コミュニケーションのなかで働くような相互行為（interaction）／相互受動（interpassion）としての知のありかたに着目する必要がある。学問性は対象との非関与的な距たりによってではなく、逆に対象との身体的＝インタラクティブな関係に入っていくことによってはじめて可能になるという考えかたである。受容的な知、対話的な思考の共有によって対話者の自己治癒能力を引き出すという、たとえばソクラテスの産婆術にみられるような哲学の原点のあり方を、現代という歴史のコンテクストのなかで蘇生させる可能性はないか、そのような問いが生ま

れてくるゆえんである。そしてそのような可能性を、ここでは、臨床的な現場で取り込まれる哲学的思考とダイアローグの試みとして、仮に《臨床哲学》(clinical philosophy)と名づけてみることにしたい。

## Ⅱ 臨床哲学への序走

### 1 《臨床哲学》という試み

《臨床哲学》とは、人びとの「苦しみ場所」、つまりは社会の臨床的な場面へと哲学的思考を差し込む試みである。臨床(klinikos)とは、もともと、ベッド・サイドに居合わせるということである。人びとが苦しみ、横たわっているその場所に居合わせるということである。その場所で哲学にいったいなにが可能か——それをまさにその現場で問うてゆく思考の試み、それを《臨床哲学》と名づけることにする。なぜ、現場ということにこだわるのか。それは哲学が思考の内部での原理一般の探究であるのみならず、他のだれかに、思考とその交換をとおしてかかわってゆくいとなみでもあるからである。

ところで、そういう意味での現実への関与性、われわれの言葉でいえば「臨床性」については、哲学、なかでも人びとの生存と生活のありかたを思考する倫理学の領域においては、しばしば「応用」という概念で表現される。この「応用倫理学」の理念に対して起こってくるいくつかの疑問は、すでに前章でみた。念のためにくりかえしておく、まず第一に、「応用」の概念は原理と応用、理論と実践といった二分法を前提としており、それゆえに、臨床から離れた非臨床的な一般理論や基礎理論が倫理学においてあたかも可能であるかのような幻想をわたしたちに与える。その結果、歴史的・社会的な状況が応用の場面としてとらえられることによって、基礎理論そのものの歴史的な制度性・政治性を隠蔽する危険があること、第二に、これら「応用倫理学」的思考はそれぞれの「応用」領域に分岐してゆくことによって、新たな専門分化に陥る危険があること、そしてそのことの結果として第三に、それが、ある意味では最終的に解決不可能な哲学的な問いを免除して、たんなる手続き論に還元されるおそれがあること、以上の三点である。

哲学、なかでもすぐれて人びとの生存と生活のありかたを思考する倫理学は、ひとが生きるその場所で、生きながら考えるいとなみである。したがってその場所から、ある問いを、ある概念を、ある思想を紡ぎだしてゆく。その場所が哲学に問いをつきつける。哲学があらかじめ獲得していた知見を、揺さぶり、修正をうながし、編みなおしてゆく。いいかえるとそれは、一般的な原理を個々の事例に適用する応用的な学ではない。個別的な事例を考察の材料としながら、そこから普遍的な原理を導きだし、それら原理を統合してゆく一個の閉じた体系を志向するものでもない。「誰でももともとその時代の息子であるが、哲学もまた、時代を思想のうちにとらえたものである」というヘーゲルの言葉を思いだすまでもなく、哲学的思考は歴史の〈外〉に立つ第三者的思考や上空飛翔的思考ではありえない。

哲学的思考は、個別的な事例のその個別のかたちにとこまでもこだわりつづけるのでなければならない。そこでは、個別的な問題が一事例としてではなく、個別的なままにかたちをあたえられるのでなければならない。個別的な事例のその小面（ファセット）に出現・消滅する「問い」を濃やかに描きだすのでなければならない。哲学がつねに厳密な体系的思考をめざすと同時に、断片的なことばによってしか描きだせないもの、あるいは問う者の息づかいや、問うその手法（マニエール）や、問われているその対象の肌ざわり（テクスチュア）にまで心をくばってきたのは、そういう理由による。

あるいは、次章でくわしく見るように、試みという意味での「エッセー」が、哲学の体系的思考とともに、哲学の歴史のなかでくりかえし追求されてきたのもそのおなじ理由による。「エッセー」はもちろん平易なことばで書かれた随想でもあったが、ロックの「人間の知性についてのエッセイ」やバークリの「視覚をめぐる新しいエッセイ」や、さらにはライプニッツの「人間の知性についての新しいエッセイ」、ヒュームの「哲学的エッセイ」など、知と理解の新しい地平を、新しい次元を切り拓く思考の発見的な試み（試論）でもあったし、さらにはモンテーニュやパスカルからはじまってニーチェやジンメル、ベンヤミンにいたる、あえて断片的な思考形式にこだわる批判的思考の運動でもあった。この最後の試みは、反体系的・反方法的な思考の運動として、ものごとの細部に、その髪や肌理を、その微細な感触のままに取りだそうとしてきた。随

筆や試論からこうした批評的断片を含む「エッセー」の思考こそ、いま哲学がとり戻さねばならない視線であり、息づかいなのではないだろうか。

## 2 《臨床哲学》の課題

それにしてもいまなぜ《臨床哲学》なのか。この問いのなかには、いくつかの思想史的な反省も含まれる。哲学はなぜ「純粹理論」の典型とされ、それが当初にもっていた実践的な「知恵」への道を見限ったのか。哲学は、すくなくともソクラテス／プラトンにかんするかぎり、ロゴスを分かちあう（つまり語らいや議論のなかでロゴスに出会う）そういう対話的知として出発したのに、その主要な方法がなぜ反省という自己内対話にとってかわられたのか。あるいはまた、作用（アクチオ）としての意識に哲学の方法とその作業場がもとめられ、受苦（パッショ）がなぜ方法としては否定的にとらえられたのか、対話がなぜインターパッションではなくインターアクションに引き寄せて理解されたのか、この点をもう一度、根本から考えなおす必要もある。スミスやヒューム、ディルタイやシェーラーの説いた感情移入（シンパシー）の概念が、まさに「苦しみをともにすること」として、意識の受容的なはたらきにポジティブな意味を見いだしていたことを過小評価すべきではないだろう。臨床哲学は、哲学にそうした受容的な意味を回復させる試みでもある。

このことは、近代科学のありかたにももう一度、光をあてなおすであろう。「知は力なり」というベーコンの言葉にもあるように、近代科学は世界を対象化する意識のはたらきのなかに、世界を統御する技術的な支配力を見いだしてきた。おなじことを裏面からいいかえると、近代科学的な知は、痛みとか苦しみといった受苦の契機を、非合理的なもの、主観的なもの、特殊なものとして、わたしたちの認識の領域から放逐してきた。が、そのことがいま、たとえば科学が世界への操作的な関心しかもてなくなっているということ、あるいは人間がじぶんたちの身体に対し、それを分析し、コントロールするという、操作的なまなざししかもてなくなっていることとして帰結しているのではないだろうか。こういう操作的なまなざしから、もう一度、世界との交感、他者との交通のなかで相互的にはたらくものへのまなざしを回復しなければならないのでは

ないだろうか。このような知の歴史の自己反省もまた、臨床哲学は視野に入れねばならない。臨床哲学は、その可能性を、知の自己批判（科学批判）の問題と切り離しては論じえないはずだという、先に確認したことを、あらためて肝に銘じておこう。

このことを、いままさし哲学史に立ち入って言いかえると、哲学が「純粹理論」として自己規定することでみずから実践的問題に対して閉鎖したという事実は、価値中立性だとか没価値性を標榜する客観主義的な学問理解、および〈基礎学〉(Grundwissenschaft)としての哲学の自己理解と切り離しては考えられない。近代的な学問理念をながく梓どってきた諸々の観念の二項対立的な構造、とくに理論／実践、事実／価値、存在／当為、記述性／規範性、合理性／情緒性、公共性／私秘性といった対立の前項を重ねあわせるとき、そこに近代の、とりわけ実証主義的な学問理念が浮かび上がってくる。すると、それに対応して実践的なことから、これらの概念対立の後項をつなぎあわせるところになりたつことになる。「普遍的な妥当性」が「客観性」に肩代わりされることによって、実践的に普遍的なことからその固有の場所を奪われ、主観的・相対的なことからへと転落させられる。存在は道徳外的 (amoral) な事実としてその価値的性格を剥がれ、知者はかならずしも賢者ではなくなったのである。

### 3 The Philosopher Goes to Town.

臨床哲学は基礎理論の応用をめざすものではなかった。いいかえると、あらかじめ理解と議論の枠組みを固定的に提示するのではなく、苦しみの現場で苦しみの事実からなにかを紡ぎだそうとするものであった。それは苦しみにかたちをあたえなおすものである、と言いかえてもよい。苦しみを理解することは、苦しみにたいする一つの構えであり、治療でもありうる。そしてそれは、苦しみについて濃やかに尋ね、問いを立て、苦しみに向かい、苦しみをほぐす試みでもあるだろう。

そのためには、まず「きく」（聴く・訊く）ことからはじめなければならない。臨床、つまり苦しみの現場に居合わせ、そこから問いを紡ぎだしていくこ

とが、なによりもはじめにもとめられることである。哲学は、語ること、分析することのみ力を込めて、《聴く》ことのはたらきにはあまりにも無神経でありつづけてきた。が、語りの内容ではなく語る声、語りの表情がひとを癒すこともある。あきらかにある。

このことは、哲学が大学という研究機関の外部に出てゆくことをも意味する。臨床哲学は「研究」ではないからである。「試み」であるからである。それにしてもしかし、その「外部」ということがふたたび問題である。哲学の「外部」、それは単純に制度や施設としての研究機関の外部ということだけではないだろう。哲学それじたいが、たとえば「基礎づけ」というかたちにおいてであれ、つねに知の制度の「外部」に出ることを志向してきたものだからである。その哲学がその「外部」に出るということは、哲学にどのようなかたちでの解体を強いるものであるかを、問いつめなければならない。「開く」ということが何の外に出ることなのかを、問いつめなければならない。それを免除したまいきなり「街に出る」のは、いささか早計であると言わざるをえない。

いうまでもなくその思考をきたえるためには、古えの知恵をふりかえることも重要である。発想のうえでもそうであるし、さらには現在、用いている言葉がある観念や概念の歴史的な系譜を色濃く背負っているからでもある。その意味で、臨床哲学的思考もまた、哲学の歴史と深く内在的にかかわる。苦しみの場所で、最終的な答えを見いだせないにしても、こう考えるとこんな答えになってしまうのではないかどうかを知るだけでも、思考の大きな支えにはなる。そういう知恵を臨床に組み込んでゆくこと、浸透させてゆくことがここでもとめられている。そのことで、苦しみの場所に置かれているひとが、みずからの苦しみの意味を理解するいとなみ、構造を理解するいとなみに参与してゆくのである。哲学がかつてもっていた人びとの自己治癒力を蘇生させる力を、臨床哲学もまためざさなければならない。哲学のなかにふたたび幸福論が蘇生しうるとしたら、そのあとである。あるいは、その過程においてである。《臨床哲学》は、ほとんど哲学の「心がまえ」のようなものにすぎないのかもしれない。あるいは、「哲学研究者」が教室ではなく街のなかでも聴きだした、しゃべりだした、ただそれだけのことなのかもしれない。それだけのことでいいから、聴くことである。話すことである。